

倫理規定と覚悟

エヌアイティーエルオー フェロー会員 ○中村 正博

1. はじめに

温故知新とは、「ふるきをたずね新しきを知る。ふるい事柄を研究してそこから新しい道理をさとる。」「昔の事をたずね求めて、そこから新しい見解・知識を得ること。」とある。ここで述べることは、筆者にできぬことばかりかも知れないが、筆者なりに共感する言葉を引用しながら、読者の参考にいささかでもなれば幸いである。

2. 倫理規定

1999年5月に土木学会理事会で制定された土木技術者の倫理規定¹⁾の前文には、「1933年、わが国は国際連盟の脱退を宣言し、盧溝橋事件を契機に日中戦争、太平洋戦争へ向かっていた。このような時代のさなかに、『土木技術者の信条および実践要綱』を策定した見識は土木学会の誇りである。」とある。また、土木技術者の倫理規定¹⁾の基本認識として、「2. 現代の世代は未来の世代の生存条件を保証する責務があり、自然と人間を共生させる環境の創造と保存は、土木技術者にとって光栄ある使命である。」とある。さらにその倫理規定には、「土木技術者は…（中略）…4. 自己の属する組織にとらわれることなく、専門的知識、技術、経験を踏まえ、総合的見地から土木事業を遂行する。…（中略）…9. 人種、宗教、性、年齢に拘わらず、あらゆる人々を公平に扱う。…（中略）…15. 本会の定める倫理規定に従って行動し、土木技術者の社会的評価の向上に不断の努力を重ねる。とくに土木学会会員は、率先してこの規定を遵守する。」と記述されている。筆者は、戦後生まれで、戦争を知らないが、それでも小さい頃の日本と現在を比べると、経済的発展はもとより生活様式だけでなく、人の立ち居振る舞いも様変わりし、何故か昔が懐かしく思い出されることがある。昨今よく耳にする構造改革、耐震強度偽装問題、談合問題などの激動社会や、子どもの殺害、病める心による奇妙な事件、そしてパレスチナやイラクやルワンダでの悲劇を目の当たりにして、無力感を持ったり、ひとごとと考えるだけでよいのか、反省してみたい。

3. 覚悟

中央防災会議によれば、東京湾北部を震源とするM7.3の首都直下型地震が起きた場合、経済被害は最悪のケースで112兆円と阪神淡路大震災の10兆円強の10倍に上ると想定している²⁾。縦割りといえば、縦割り行政を想起される方が多いかと思うが、様々な災害、世界の国々、官学民のそれぞれ、理系と文系などの学問分野、土木と建築、企業ごと、大企業と中小企業、職業別、富裕層と貧困層、強者と弱者、日本人と外国人、高齢者と若者、究極的には個人個人など、あらゆる縦割りについて反省し、近い将来、来襲するであろう災害に備えなければならない³⁾。

松下幸之助によれば、人生とは、一日一日が、いわば死への旅路である⁴⁾。生あるものがいつかは死に至るというのが自然の理法であるかぎり、ものみなすべて、この旅路に変更はない。ただ、人間だけは、これが自然の理法であることを知って、この旅路に対処することができる。天命とは、これだけのことをつくしたから、これだけの結果があたえられるという、そんな計算の成り立つものではない。まして、私心多くなすべき人事もつくさず、いたずらに都合よき成果のみきたいするのは、天命を知らざることはなはだしいといわねばなるまい。めまぐるしい利害の波の日々の中ではあるけれども、時におたがいに三省してみたいものである。神さまではないのだから、全知全能を人間に求めるのは愚の限りである。人に求めるほうも愚なら、いささかのうぬぼれにみずから心おごる姿も、また愚である。人を助けて己の仕事が成り立ち、また人に助けられて己の

キーワード 倫理規定、首都直下型地震、道をひらく、新約聖書、マザー・テレサ

連絡先 〒214-0001 神奈川県川崎市多摩区菅2-10-26-407 (株)エヌアイティーエルオー

TEL: 044-944-9149 E-mail: nakamura@nitlo.com <http://www.nitlo.com>

仕事が円滑に運んでいるのである。この理解と心くばりがなければ、百万の人も単につのつき合わした烏合の衆にすぎないであろう。まことに宗教は尊い。だがしかし考えてみれば、商売というものも、この宗教に一脈相通ずるものがあるのではなからうか。商売というものは、暮らしを高め、日々をゆたかに便利にするために、世間の人々が求めているものを、精いっぱいサービスをこめて提供してゆくのである。だからこそ、それが不当な値段でないかぎり、人びとに喜んで受け入れられ、それにふさわしい報酬も得られるはずである。それを、心ならずも値切られて、正当な報酬も得られないままに苦しむということであれば、これははたしてどこに原因があるのであろう。おたがいに、宗教の尊さとともに商売の尊さというものについても、今一度の反省を加えてみたいものである。天災地変をまつまでもなく、粒々辛苦の巨万の富も、事あらば一朝にして失われてしまうことがしばしばある。形あるものはいつかは滅びるにしても、まことにはかない姿であるといえよう。だがしかし、身についた技とか習性とかは、これは生あるかぎり失われない。たよりになるのは、やはり自分の身についた技、習性。すべてのことにおいて、いろいろの姿で刻々に「覚悟はよいのか」と問われているのである。そのことをみずから察知して、自問自答するかしないかは、その人の心がけ一つであらう。まして昨今のわが国の社会情勢、経済情勢は、世界の動きとともに寸刻の油断もならない様相を呈しつつある。つねに「覚悟はよいのか」と問われることを、おたがいに覚悟したいものである⁴⁾。一つひとつ心に残る言葉である。

新約聖書によれば、「よく聞きなさい。『今日か明日、これこれの町へ行って一年間滞在し、商売をして金もうけをしよう』と言う人たち、あなたがたは自分の命がどうなるか、明日のことは分からないのです。あなたがたは、わずかの間現れて、やがて消えて行く霧にすぎません。」⁵⁾とあり、これも納得できる。

マザー・テレサは、1910年8月26日に旧ユーゴスラビアのスコピエで生まれ、17歳で一生を神にささげ貧しい人たちのために働こうと決心し、18歳の時家族のもとを離れアイルランドのロレット修道会へ向かい、そこからインドに派遣された⁶⁾。1946年8月16日に、インドではヒンドゥー教徒とイスラム教徒との間で暴動が起こり大虐殺が行なわれた。1947年8月15日にインドがイギリスから独立し、パキスタンがインドから独立すると、難民がカルカッタに押しよせた。インドの独立の父であるマハトマ・ガンディーが暗殺された1948年に、マザー・テレサはロレット修道会を離れ、そんなカルカッタのスラムに入ったのである。こうして、1950年にメンバー12人で「神の愛の宣教者会」はスタートした。飢えて誰にもみとられずカルカッタの路上で死んでいく人びとのために1952年に最初の「死を待つ人の家」をはじめ、「孤児の家」、「ハンセン病の人たちの家」を創設した。カルカッタで始まったこうしたマザーの「貧しい人の中でも最も貧しい人びとへの献身」という活動は、1993年の時点でインド各地を中心に世界105カ国、504ヶ所に広がり、シスターの数も4千人に増えた。マザーは私物を持たず、ノーベル平和賞受賞の際にも「私は受賞者には値しませんが、貧しい人を代表して、この名誉ある賞をいただきます」と述べているが、受け取った賞金、献金、品物、救助物資は、片っ端から貧しい人びとのために使われたのである⁶⁾。できれば見習いたいものである。

4. おわりに

「自分が世の中にたった一人しかいない」ことを自覚し、地球上の一人ひとりが、かけがえのないたった一つの命を生きていることを認識しよう。そういう意味での自分の準備ができたら、家族、お隣さん、友人、そして弱者、貧困に苦しむ国々の人々のためにも役立つことを、一つひとつ実行してゆくのではないか。これまでの縦割りの壁を乗り越えて、災害はもちろん人生の壁と一緒に乗り越えようではないか。

参考文献

- 1) 土木学会：土木技術者の倫理規定、<http://www.jsce.or.jp/outline/frameset.htm>
- 2) 日本経済新聞：首都直下地震、経済被害最悪 112 兆円、中央防災会議「阪神」の 10 倍に、2005. 2. 26
- 3) 中村正博：必ず来る「まさかの災害」に備えて、土木学会第 60 回年次学術講演概要集、2005.
- 4) 松下幸之助：道をひらく、PHP 研究所、1968.
- 5) 共同訳聖書実行委員会：新約聖書、日本聖書協会、1987.
- 6) ホセ・ルイス・ゴンザレス・バラード編、鳥居千代香訳：マザー・テレサ最後の愛の言葉、明石書店、2000.